

資料群 解題

寄贈者紹介

岡本達明（おかもと たつあき 1935～）は東京生まれ。水俣および水俣病の民衆史編集・執筆をライフワークとする。第二次世界大戦敗戦後、一晚にして学校教育や社会構造が根底から変化した少年時代の経験が原体験となり、「上」の世界は脆い、むしろ「日本という社会の基底を掘り下げていったらどこに行き着くのか見てみたい」と考えるようになった。そのような初心から、1957年に東京大学法学部を卒業した後、資本主義社会を動かす製品生産の現場である工場を「社会の基底への入口」として就職先に選んだ。同年、明治期から稼働する古い工場を持つという新日本窒素肥料株式会社に入社。のちのチッソ社長となる後藤舜吉は同期である。入社後、岡本の希望通り工場の位置する水俣に配属されるが、思想家で詩人の谷川雁らとの交流が会社に知られ大阪営業所へ転勤となる（谷川はその後福岡へ移住し、筑豊・大正炭鉱争議を指導）。この時期の谷川雁との対話から、「村と工場を等置しその歴史のひだをたどる」ことで日本の近現代の基底を明らかにするという、岡本のライフワークにおける基本姿勢が形作られた。この構想から、その後『聞書水俣民衆史』（1990）が編まれた。

東京本社と福岡営業所での勤務を経て、1964年にチッソ水俣工場第一組合専従執行委員としての水俣配属が決定。丸島の小松原という漁師部落に住む。組合員たちに水俣と工場のことを聞き学びながら、地域集会に参加し、教宣部長として機関紙（新日窒水俣労組機関紙『さいれん』）を書いた。1968年、日吉フミコと松本勉らによって結成された「水俣病市民会議」に入る。市民会議の裁判班班長となり、裁判（一次訴訟）に勝つための体制作りに尽力した。当初岡本は1963年医学部発表のとおりに、水俣病は1960年に終息した問題だと思っていたという[註1]。しかし、訴訟に勝つための原告準備書面作成に向けて同年結成した「水俣病研究会」[註2]での討論の中で、いまだ膨大な数の潜在患者が存在すること、チッソ工場が責任を逃れようとしていること、水俣の戦後最大の問題は水俣病であることを知った。討論では、「水俣病」の医学的定義とは、「水俣病」とはいったい何かという抜本的な点から問い直された。「資本主義社会の基底である工場が、さらなる基底である自然を壊し、住民を殺傷している」、そう考えた岡本は水俣病を日本現代の基底そのものにとらえ『水俣病の民衆史』（2015）を執筆するに至る。

1970～78年チッソ水俣工場第一組合委員長を務める（後任委員長は山下善寛氏）。1975年末頃から体調を崩し1978年に組合委員長を辞して以降、本来やりたかった「民衆の聞書で日本の近・現代の基底を明らかにする」という仕事に本格的に取り組んだ。1990年チッソ株式会社退社。1991年まで水俣に住んだ。現在は、長年手書き原稿の印字に協力してきた妻雅子氏と共に、東京都の自宅で収集資料の整理を行う。

- 註 1 徳臣晴比古他 1963 「水俣病の疫学」『神経研究の進歩』7(2)、野村茂 1966 「第 2 章 水俣病の疫学」『水俣病—有機水銀中毒に関する研究—』編集主幹 忽那将愛 pp.10-47
熊本大学医学部水俣病研究班出版
- 註 2 「水俣病研究会」結成メンバー・・・熊本大学：原田正純、二塚信、富樫貞夫、丸山定巳、有馬澄雄／市民会議裁判班：岡本達明、花田俊雄、山下善寛、小坂谷義／告発する会：本田啓吉、宮沢信雄、半田隆、小山和夫、石牟礼道子／外部協力：宇井純、近藤完一、阿部徹ら

寄贈者編著作紹介

- ・『聞書水俣民衆史』全 5 巻 岡本達明・松崎次夫編 草風館 1990 年
 - 第 1 巻 明治の村
 - 第 2 巻 村に工場が来た
 - 第 3 巻 村の崩壊
 - 第 4 巻 合成化学工場と職工
 - 第 5 巻 植民地は天国だった
- ・『水俣病の民衆史』全 6 巻 岡本達明著 日本評論社 2015 年
 - 第 1 巻 前の時代—舞台としての三つの村と水俣湾
 - 第 2 巻 奇病時代 1955-1958
 - 第 3 巻 闘争時代（上）1957-1969
 - 第 4 巻 闘争時代（下）1968-1973
 - 第 5 巻 補償金時代 1973-2003
 - 第 6 巻 村の終わり
- ・『水俣病の科学』西村 肇・岡本達明著 日本評論社 2001 年（増補版 2006 年）

寄贈受人

本館は岡本氏と覚書（2017 年 7 月 14 日付）を交わし、資料のデジタル化・保存・管理および研究目的での資料活用を前提とした資料寄贈を受けた。本資料群＝MD02 は大きく以下 3 つの内容から成る。全て事前に岡本氏本人による丁寧かつ詳細な整理分類が行われており、本館では同分類方針に沿った保管を行っている。カセットテープには岡本氏による聞き取りが録音されており、フラットファイル・ノートには調査記録と書き起こし等が記されている。

A 『聞書水俣民衆史』全 5 巻関係 ID: MD02-A

MD02-A01 カセットテープ 1481 本（+WAV データ 1 点）

MD02-A02 フラットファイル・ノート・機関紙 41 冊（細目 675 点）

B 『水俣病の民衆史』全 6 巻関係 ID: MD02-B

MD02-B01 カセットテープ 416 本

MD02-B02 フラットファイル・ノート 55 冊 (細目 799 点)

C チッソ工場関係／『水俣病の科学』関係 ID: MD02-C

MD02-C01 聞き取りカセットテープ 191 本

※来年度以降も引き続き寄贈受入予定

合計：2184 点

目録&資料公開方針

本館では岡本氏と話し合いながら資料の受入れと目録および資料公開を進めています。2017～2019 年度の間、大きく 3 回に分けて、岡本氏宅から資料をお送りいただきました。2020 年度以降も順次受入れを行う予定です。本館では公開準備ができた目録から順にウェブ公開し、資料を利用に供します。

目録は寄贈資料に関する岡本氏作成文書と岡本氏とのやり取りを参考に、文書館担当者が資料を確認しながら形を整え作成しています。資料群は 3 つのテーマ：A 聞書水俣民衆史 B 水俣病の民衆史 C チッソ工場 と 2 つの媒体：01 カセットテープ 02 フラットファイル・ノート等 に分類されます。目録・解説のウェブ公開とレファレンスの充実を進め、より多くの方々に水俣と水俣病の民衆史に関心を持っていただければ幸いです。また本館は、これらの資料から今後新たな研究が生まれていくことを望んでいます。

個人情報とプライバシー

聞書編纂のための資料という性質上、本資料群には多くの個人情報とプライバシーにかかわる内容が含まれています。本館では内部用の詳細目録と外部向けの個人情報等無記載目録の 2 種を作成し、外部向け目録のみをウェブ上で公開しています。目録公開の際に個人情報やプライバシーにかかわる内容については充分注意を払ったつもりですが、不都合な点等がございましたら以下にご連絡いただければ幸いです。また、ご本人、ご親族や研究者の方で目録に記載されている内容より詳しい情報をお求めの方も、以下にご連絡ください。資料は岡本氏の編著作と対応していますので、お問い合わせの際はぜひ編著作をご参照ください。

電話：096-32-3951／ FAX：096-342-3952

メール：archives@jimu.kumamoto-u.ac.jp

郵便：〒860-8555 熊本市中央区黒髪 2 丁目 39-1 熊本大学文書館 宛

デジタル化プロジェクト

本館では慶田科研（基盤研究 A：水俣病事件の記憶術と（脱）アーカイヴ構築—未来の人文社会科学的総合研究に向けて、2016-2020 年、研究代表者：慶田勝彦、研究課題/領域番号 16H01970）との連携により、寄贈カセットテープのデジタル化プロジェクトを進めています。作業終了は 2020 年度になる見込みです（作業者：慶田科研事務支援員 中山智尋）。デジタル化プロジェクトは岡本氏ご本人の強い希望から始まったものであり、本館でも水俣の古老たちの語りと声を後世に遺すうえで重要な仕事だととらえています。劣化したテープは本館で可能な限り修復し、デジタル化しています。デジタル化することで、マスターテープ自体を痛めることなく、同じ音質の内容を繰り返し聴くことができるという利点もあります。同時に、デジタルデータの脆弱性を加味し、貴重な記録媒体であるマスターテープ自体も引き続き保存いたします。長い時間をかけて完成された聞き編著と共に、一次資料である水俣の「声」と「音」をぜひ一度本館にてお聞きください。

原則として、岡本資料およびそのデジタルデータは文書館内での閲覧・視聴に限った利用を行っております。いずれのご希望につきましても、まずは文書館までご相談ください。

謝辞

岡本達明資料の本館への資料寄贈と資料整理作業は、水俣病研究会と慶田科研の協力により実現しています。また、ほぼ欠損がない形で聞き書の一次資料が残っているのは、岡本氏ご本人による丹念な資料保存と整理のおかげです。岡本ご夫妻はじめ、ご協力いただいた皆様に厚く御礼申し上げます。

(2019 担当・香室)